地域情報（県別）

【富山】医療・介護崩壊を防ぐには、医師によるZoom講習とLINE相談が生命線-野村明子・とやま安心介護ネットワーク代表らに聞く◆Vol.2

2021年4月9日 (金)配信 m3.com地域版

富山県内では医療・介護の崩壊を恐れた医師らが、介護職との対話を通して情報共有を行う仕組み「とやま安心介護ネットワーク（TAKN：タックン）」を設立した。メンバーはZoomで新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大を防ぐための情報を共有、現場で生じた疑問をLINEで問い合わせるなどした。介護職にとって、どんな情報が有益だったのか。どんな悩みを相談したのか。また、ネットワークの意義についても考えてみたい。TAKN代表・野村明子氏（介護支援専門員、薬剤師）、副代表・平田洋介氏（社会福祉法人の統括施設長）、コアメンバーの酒井淳子氏（介護支援専門員）に聞いた。（2021年2月26日にインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

――医療・介護現場の情報共有は、これまでもその重要性を双方が認識していたはずです。しかし、現実には難しかったのでしょうか。

野村　医療従事者は感染対策を学ぶことができているのに、それが介護の現場にまでは届いておらず、断絶があったことが課題でした。介護の現場は多様な職種の人が働き、サービス種別も多様です。また、団体の縦割りが強く、ヒエラルキーもある。そういった中で、職種や組織を越えて情報を共有することが大切だという認識はありました。

野村明子氏

富山県では2020年4月前半に公的病院や高齢者施設でクラスターが発生しました。後にTAKNのアドバイザーとなる富山大学附属病院総合診療科の山城清二教授らが4月25日にその施設に入ったところ、ゾーニングが行われていなかったと聞いています。保健所は通常業務に加えてPCR検査の手配や入院調整、濃厚接触者の後追いなどで忙しく、介護施設や従事者の困りごとに携わる余力はありませんでした。そこで「自分たちのことは自分たちで考えていこう」という方向性に落ち着いたのです。

平田　最初にクラスターが発生したとき、「犯人探し」が起こったことが大きなトラウマとなっていました。「黒ひげ危機一発」ってありますよね。たるに刀を差していき、失敗すると人形が飛び出すゲームです。あれをやっている心境でした。「次はうちの施設がクラスターを出すかも」という重圧に押しつぶされそうでした。

――必要に迫られ、クラスターを予防したいという危機感からTAKNは生まれたのですね。皆さんが活用している医療・介護の情報共有ツールはZoomとLINEとのことですが、ネットワークの規模と運用の仕方はどうなっていますか。

平田　LINEの登録数は2月26日現在で676人です。Zoomによるミーティングは最も多い時で67人が参加しました。Facebookでも情報を発信しています。SNSを活用することで、医療や介護の関係者に徐々に活動が浸透していきました。

Zoomミーティングの様子（平田氏提供）

野村　感染防止のビジョンを共有するためには医師や感染管理認定看護師のエビデンスに基づく解説が不可欠です。根拠を示してもらうことで納得できます。月2回のZoomミーティングの前にコアメンバーが打ち合わせをし、開催した後でそれを振り返るということを繰り返しました。どの場面にも必ず医師の参加がありました。LINEは現場で疑問が生じたとき、すぐに問い合わせし、答えを求められる利点があります。また、全国の最新の情報を取り入れるツールともなりました。「風の緊急特別応援（ふんわりチャンポン大作戦）」でつながった医師のネットワークを頼りに、ほしい情報を貪欲に求めました。

――医師はどのように対応してくれましたか。

酒井　富山市まちなか診療所の渡辺史子医師に質問すると、答えとともに「どんどん拡散してほしい」と言って出所のしっかりした情報を提供してくださいます。テレビやネットで怪しげな情報が拡散される中、医師が科学的根拠に基づいた情報を取捨選択して持ってきて共有してくれたのがとてもありがたいです。こういったネットワークがなければ「困ったわねぇ」と頭を抱えて終わりだったと思います。

平田　渡辺先生がおっしゃった「これからの地域医療は、医療職と介護職が現場で一緒に考えて前に進むべき。実践者が現場で、どうしようかと一緒に考えながら、答えを模索するのがこれからの地域で求められる在り方ではないか」という言葉が印象に残っています。

平田洋介氏

――具体的にどのような質問をしたのでしょうか。

酒井　マスクやガーゼなどが枯渇している時期、「マスクは使い捨てでなければならないか」とか、「防護服がない場合、どうすればいいか」などと聞きました。答えをLINEで拡散し、ゴミ袋を活用して防護服のような着衣を作る方法をZoomで講習しました。クリアファイルでフェースシールドを作る方法も共有しました。

野村　デイサービス施設での換気をどうするのが正解か。冷暖房機器の効果との狭間で、皆さん悩んでいました。季節が変わるたび、施設ごとに、いろいろな質問が出ましたね。

平田　「マウスシールドは実は、それほど意味がない」ということは、かなり早い段階から教わりました。

――現場での課題を共有したり、学んだ成果を持ち帰って検証したりするネットワークが構築されていったことを振り返り、どんな価値があるでしょうか。

野村　会費が無料であり、気軽に登録でき、相談、情報収集ができて、興味があればどんどん学ぶことができる「自由度が高い活動」です。医療職との心理的な距離が縮まり、新たな人とのつながりができました。心の支えとなる仲間とつながり、「やればできる」という自信が生まれたのです。

右肩上がりの時代には組織をつくり、そこに人を縛り付け、維持せねばなりませんでした。かっちりとした確かな組織があってこそ、何かを始められるという認識だったと思います。しかし、今の時代はそうではない。緩やかにいろんな人がつながり、その人たちは組織に縛られない。そういったやり方は、これからの時代に合っていると思います。

平田　声を掛けていく段階で「いい人を集めよう」と言い合いました。分かりやすい目的の明確化と共有が大切で、自主的に学び、自主的に実践できる人。「やりたいから、やる」という人が緩やかにつながって成果を上げていったと思います。

野村　そういった意味では、Zoomを使えるかどうかは一種の「ふるい分け」の作用をもたらしました。午後7時からという時間帯だったことから、組織の肩書よりは個人の思いで参加することになりました。

酒井淳子氏

酒井　行政の担当者の中には公的な役割を担っている観点から、ネットワークに積極的に加わることを断念したケースもあります。「やってみよう」と思い、挑戦し、実際にやることができた方同士が仲間になりました。ネット上での関係から実務でも関係性ができていく場合もあります。TAKNを通じてどんどんいい連携・関係が広がるといいです。

――ワクチンの接種が始まりました。今後、TAKNの活動は、どのように変化していくでしょうか。

野村　2月17日のZoomミーティングでは、富山県衛生研究所所長の大石和徳医師がワクチンの効用について講義しました。有効性を検証するため、TAKNを通じてモニターを募集することになり、多くの施設関係者が関心を寄せていました。窓口となり、つながっている施設の高齢者や職員がワクチン接種を受け、データを検証した成果を共有されることで、いろいろなメリットがあると考えています。

富山市中心部の商店街や商工会議所ともつながり、商店・飲食店を回って感染防止対策のチェックや、チラシ・マスクなどを配りました。医療・介護以外の分野との連携も進んでいます。

富山市中心部の商店街と連携して活動している

平田　飲食店の方からは「自分たちの生活を守ろう」という熱意を感じました。医療・介護の現場ではCOVID-19によって本当の意味で多職種交流ができた気がします。終息した後は、TAKNで介護報酬改定の勉強会などをやってみたらどうでしょう。そのときの課題についてネットワークを通じて解決策を検討することができるはずです。

酒井　医療・介護の現場は常に人手不足です。にもかかわらずCOVID-19によって業務が増えました。大変さは、なかなか分かってもらえない。TAKNでつながり、語り合うことにも効果があったのではないでしょうか。

野村　癒やされているなと思いました。

――「医療・介護崩壊を防ごう」という思いで一丸となってきた1年弱を振り返り、最後にひと言お願いします。

野村　アドバイザーである山城医師、種部医師が何度も「1人、2人感染者が出るのは仕方ない。それ以上広がらず、クラスターを出さなければ『よくやった』と認めることが大切」と励まし続けてくれたことに感謝します。介護職は知識を蓄積し、主体的に、自信を持って行動することができたと思います。

平田　「私たちの役割は、介護現場の人に『これで大丈夫』という安心やお墨付きを与えること」と医師から言われました。大学病院の若い医師（総合診療医）が現場に行くことで、介護関係者の意識が変わりましたし、効果は満点でした。医師たちからも「貴重な体験だった」と聞いています。

酒井　活動が始まった当初、感染者を出した施設の関係者からは「申し訳ない」という思いが伝わってきて、心が折れるような気持ちを味わっておられたように見受けました。正確な知識がなければ誰でも不安です。ですが、TAKNの活動を続けたことで誹謗中傷は少なくなっていったように思います。

◆野村 明子（のむら・あきこ）氏

1988年金沢大学薬学部卒。薬剤師、介護支援専門員。居宅介護支援事業所「千石ケアサービス」代表。富山県介護支援専門員協会会員。

◆平田 洋介（ひらた・ひろゆき）氏

2014年富山大学大学院医学薬学部看護学科地域看護専攻修了。主任介護支援専門員、介護福祉士、社会福祉士。社会福祉法人Q・O・L福祉会業務執行理事、統括施設長。富山県介護支援専門員協会常任理事。富山市介護認定審査会委員、社会福祉法人浦山学園福祉会監査理事、富山大学人間発達科学部発達教育学科非常勤講師。

◆酒井 淳子（さかい・じゅんこ）氏

1984年富山女子高校（現・富山いずみ高校）家政科卒。立山町にある医療法人に25年間勤務し、相談員、事務長などを務める。主任介護支援専門員、社会福祉士。居宅介護支援事業所「やまやまハウス」管理者。富山県介護支援専門員協会会員。

【取材・文・撮影＝若林朋子】

記事検索

ニュース・医療維新を検索